

52. <餅は餅屋>

どこの下水処理場でも頭痛の種は汚泥処分。大都市では焼却なり、セメント利用なりにコストをかけ、或いは民間活力で有効利用となりますが、町村では、やはり特性を活かした循環利用をしたいものです。食物循環が図れるコンポスト利用と思うのですが、焼却炉なみの費用をかけてコンポスト施設を作っても、使ってくれるところもなく山積み。自家利用をしやすはずの集落排水事業でも、苦勞しているようです。過去の調査報告書を見ても、肥料の三要素（リン、カリ、窒素）に関するものか、汚泥中に含まれる重金属の規制に関する調査ばかりで、最後は「今後の課題」で終わっています。

そんな時、農業関係者と出会うちょっとした機会がありました。「肥料の三要素だけでは、植物は育たない」。「土地がやせるとは、次第に土中の重金属（農業では稀有微量元素というそうです）が不足し植物が育たなくなることを言う」、「コンポストは肥料でなく土」と言います。コンポストなんて簡単にできると、下水汚泥 100kg に、糠 10kg、酵素を少々、2-3 日し、温度が下がってきたところでスコップでフライ返し、・・・とレシピをまとめてくれます。では、と、その方の倉庫に採りたての下水汚泥を運んで調理。3 週間で完成。というものの、やはり、悪臭、小ハエの発生で、そのままでは使い物になりません。

しかし、そこからは餅屋。「地産地消の〇〇（秘密です）を 100kg」、「小バエは燻蒸で」、「悪臭は熟成させ」、いろいろなアイデアがでてきます。事業化するには、まだまだですが、やはり利用者に相談に乗ってもらうのが一番です。

< 荒井 俊博 >

※No. 58 号(2006/9/8)に掲載